

■あしがき

平成24年2月に委員会が始動しました。24～25年度は「里山」についての認識の共有、そして求める里山の姿について論議がおこなわれました。委員、アドバイザーあるいは事務局関係者の皆さんが持つ里山のイメージは、それぞれの年代や生活してきた地域・経験により大きな違いがありました。里山の概念を共通認識する過程を十分に踏まないと、委員会が常に混乱するだろうことは明白でした。

その後の論議で、里山といわれている山地・山麓地域は、過去数百年にわたる森林資源利用により形成・維持されてきた人為的自然環境であること、50年ほど前に日本が森林資源に依存する社会から、石油など化石燃料・地下資源依存社会に転換するなかで、人々が里山から撤退してきたことなどを再確認しました。同時にこうした時代の流れの中で、里山では、松枯れや野生動物数の増加による人間との軋轢が急増していること、また、近年の異常気象に伴う特異的な山地災害の発生、草原性チョウ類の減少にみられる生物多様性の低下などについても議論がなされ、里山の重要性と里山再生の必要性が改めて確認されました。なお、計画で対象とする里山の範囲は、カラマツ林などを含む民有林地域すべてとしました。

次に「どんな山(森林)にすればいいのか」という疑問が改めて投げかけられました。「うさぎ追いし、彼の山」というような広い原野的環境の再生は、どう考えても無理がありました。こうした議論の中、昔の里山は人々の森林資源利用により形成されてきたのだから、良好な里山環境の再生には伐採を伴う木材資源利用システムの復活が不可欠であること、また市民の皆さんに里山で活動するための知識・技術を得ていただくこと、そして松枯れや獣害防止の検討が極めて大切であることに意見がまとまりました。

また、ワーキンググループ(専門部会)を設けて検討をおこないながら、安曇野市内の里山の現状視察、木材利用先進地域の視察などをおこないました。26年度には、(1)里山資源の利用、(2)里山での活動促進、(3)松枯れ・鳥獣被害の減少という3つの課題を設け、○木質バイオマス利用促進、○安曇野材利用促進、○里山学校、○里山保全・体験学習、○松枯れ対策実践という、5つのプロジェクトから構成される里山再生計画を作成しました。

作成された再生計画は、進行方向とプログラムを示したに過ぎません。これから、どれだけのことか実行されるかにより、里山が提供してくれる豊かさが決まって行きます。本計画が、子供たちまたその子供たちへと豊かな里山を引き継ぐための活動に役立つことを望んでやみません。

最後に、3年間にわたり熱心なご討議とご協力を賜った委員の皆様、ならびに委員会を支えて下さった関係者の皆様に心より御礼を申し上げます。

安曇野市里山再生計画検討委員会 委員長 片倉 正行